



Title	生産力としての労働力について:暉峻義等博士に学ぶ
Author(s)	荒又, 重雄
Citation	北海道大學 經濟學研究, 18(3), 229-245
Issue Date	1968-11
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/31181">http://hdl.handle.net/2115/31181</a>
Type	bulletin (article)
File Information	18(3)_P229-245.pdf



[Instructions for use](#)

<研究ノート>

## 生産力としての労働力について

—— 暉峻義等博士に学ぶ ——

荒 又 重 雄

経済学がしばしば生産の質料的内実についての理解を失ない、したがってまた労働力の内容についての理解を失ないがちな今日、労働力商品の概念の正しい把握のためには、生産力としての労働力について、絶えず理論的反省を加えることが大切であるように思われる。そのいみで日本における労働科学の確立に力を尽された暉峻義等博士の論文の中に、博士の「労働力」概念を探り、これを批判的に受けつぐべく試みることは、意義をもちうることであると考える。あくまでも生産力としての労働力の発展に固執された暉峻博士の所説に学ぶことによって、社会政策学における「生産力説」克服は、われわれにとって一層確固たるものとなるであろう。

とりあえず、ここでは、公刊された著書の中から、「生産と労働」（昭和13年9月）、「労働力の再編成」（昭和15年7月）、「勤労と文化」（昭和16年11月）をとり上げ検討することにする。

### I

暉峻義等博士は、倉敷労働科学研究所設立当時のことを回想し、大原孫一郎氏に案内されて深夜紡績工場を巡視したときの印象を次のようにのべている。

「この日、私の目のあたり見た工場と労働との現実には、余りにも悲惨なものであった。人間の機械への隷属、悦びなき賃銀のための活動、生命の萎縮、こうした現実には異常なる力を以って私に迫って来た。その現実には力の限り突入し、人間生活に幸福と悦びと凱歌とをもたらそうとする鬱勃たる意欲、私

はこの二つの急迫したる私の心境を自ら観た。この時私は自らの使命をハッキリ見出し得たのである。……人間を尊び、生命を重んずること、この基礎の上にこそ、国民の凡ての生産的任務が許容せらるべきである。人間生活並びに生命の機杼の自然性に基き、それに基づいてこそ、生産の人的要素の繁栄従って産業悠久の繁栄と国民の福利とが確保せられるのである。かくて産業活動の現実に関する精細なる資料の獲得と、生命機杼の自然性の認識のための研究とは、我々の使命の遂行に關しての二つの重要な研究目標<sup>(1)</sup>となった。

暉峻博士が立てたこの二つの研究目標とくらべてみるならば、「能率のことは労働科学に委ねて置けばよいと云うのは狭少な考え方である」<sup>(2)</sup>「富は人間の能力に依って作られるところの生産物にすぎないのである。富も経済現象も挙げて之れ人間の能力の顕現であると見る処に問題の重要さがあるのである。……富は人間がその能力によって知識を向上し、技術を創造し、以て資源を開発する処に生ずる」<sup>(3)</sup>したがって、最も大切なことは、「父祖相伝の国民的財産としての労働力を、時を誤たず、機を捉え、これに適當なる指導と陶冶を加えて育成し、以てこの遺産を更に優良なる資材として次の時代に伝えてゆくこと」<sup>(4)</sup>なのである。また、同じく、「わが邦土の中で行なはれるいかなる労働も、またその労働によって出来上るいかなる生産品も、商品も、それが今日さうである如く、苦痛を表徴する労働の産物ではなくして、技術と労働との愉悦を表徴するものであらしめること、そこに労働科学の重大な役目がある」<sup>(5)</sup>のである。暉峻博士は、「七度生れ變っても断じてこの任務を果さねばならぬ」<sup>(6)</sup>とさえ述べている。

暉峻博士において労働力とは何か。とりたてて問題にしうるような形式的定義は与えられていない。しかし労働力を人間性にとって何か外的なものともみえず考え方に反対している。すなわち、「ここに労働力というのは、決して身体的な方面のみを意味するのではない。又生産機械としての人間の働きを云うものでもない。労働力は身体的、心的並びに精神的な意味において全面的に把握せられなくてはならぬものである。従って労働力を保持し又それ

を伸張するためには単に生理学的な見地ばかりではなく、更に心的、精神的観点からも、これを考慮しなくてはならぬことは勿論である。即ち労働力の保持、伸張は人間の働きに関する全体的立場からして行なわれなくてはならぬのであって、単に身体の局部的機能の強化、或はある一定の臓器系列の働き強化、或はエネルギー機械としての人間の機能の向上と云うような方面ばかりでは決して満足されるものではないのであって、所謂心的態度又は精神的努力、即ち人間の作業能力に対する精神的関与をも十分に考慮するの必要が存するのである。従って労働力の強化、向上は人間の身体的、精神的な働きの全部の向上を目標としなくてはならぬのである」<sup>(7)</sup>ここで暉峻博士は、人間は畜力のごとき「生産機械」であってはならぬこと、精神と肉体の合一物としてみなくてはならぬこと、全体的能力を破壊するような部分的能力の発展は肯定的に評価しえぬこと、をのべているものと考えられる。博士は労働者との懇談の中で「労働力というのは、希望と意気にもゆる精神と、健全なる肉体との完全に融和した、一体の姿を云うのである」<sup>(8)</sup>、とのべている。

一方、暉峻博士は、労働力の概念に何らか生産関係に関するものが混在してくることを警戒している。「労働力の伸張と云うことは、時としては、生産高の増加を意味するものであったり、生産単位に対する生産費率の低下を意味するものであったり、又時としては疾病率の低下、災害率の減少、労働移動率の減少を内容とし、又は従業員の賃銀収入の増加を、その表示と見做されるのであるが、これらは真実に労働力の強化、伸張を意味するものではありえない」<sup>(9)</sup>。

暉峻博士によれば、「労働力の向上発展とは、これを一言にして云へば、従業員の日常生活の全体的向上発展をさして云うのである」<sup>(10)</sup>。こう述べられる場合、博士は、労働力を人間性の基本的内容の一つと考え、人間性全体との切りはなしがたい統一を考え、あらゆる歴史的時代を通じての労働者の生活の世界史的向上の流れの中に労働力の向上発展を考えようとされているのである。博士はしばしば、住居その他日常生活の場の整っている農家は生

産力が高いことを例証としている。

「生命機杼の自然性の認識」にもとづいてなされる現実の生産活動の分析は、暉峻博士において、「果して現在の産業界は国民の身体及び精神の能力を最も効果的に使って居るかどうか」という観点、「国民の」あるいは「人間の心身能力を最も有効に適切に使う」という観点<sup>(11)</sup> からなされることになる。この場合、「有効に適切に使う」のは労働力であって、労働力商品が考えられているのではない。「人間の作業能力の上にながらみと組み立てられる所の生産組織でなければ、国家の持つべき、また国家に必須なる健全なる生産組織ではあり得ない。なぜならば、国民の生命を犠牲にし国民の健康を犠牲にするような生産力の国民への強制は、是は民心をして安からしめ国民の厚生を図るの方途ではない」<sup>(12)</sup>からである。博士は、現存する生産の特定の社会的形態を分析するのではなく、労働科学に依り、あくまでも生産力の立場に立って、あるべき社会を考えようとするのである。

かくて、暉峻博士は、あるときには「労働の能力を浪費」することと「その能力を活用」<sup>(13)</sup>することを区別し、またあるときには、「国民力を使う」ことと、それを「涵養」することを区別している。<sup>(14)</sup> 労働力を有効に「活用」することは、「労働力の涵養」であり、「労働力の保持と強化」のことなのである。すなわち博士は、適切になされる労働こそが労働力を保全・発展させるという考え方に立っており、「重筋肉的労働」に従事する労働者が、作業をつうじて自らの体質を強化、発展させていることを例証しつつ、<sup>(15)</sup> 次のようにのべている。「われわれは既に過去十年の間種々、同僚と共に『作業能力とは何であるか』と云う事を研究して来たのであるが、作業能力は勿論遺伝的な要素を有って居るのである。即ち親譲りの素質である。この遺伝的財産は陶冶訓練に依り、或は作業を営むことによって、作業現場に於て日々発達を遂げて行くのである。変化をしない作業能力はないのである」。「作業場は作業能力の涵養場である。作業場は作業能力の発育場である。作業場はまた同時に作業能力の訓練場である」。<sup>(16)</sup> 暉峻博士はこのような考え方から、労働条件の問題が、「たかだか消極的な意味で、労働保護というような

軟弱な理想のもとに、これらの事項が取り扱はれることを常とし、「決して労働力伸張という観点に於て考へられなかったことは頗る遺憾である」<sup>(17)</sup>とするのである。「人間を造り上げることは、品物を造ることよりも、一層に根本的な仕事である」。<sup>(18)</sup> このように博士は、労働力を重要視し、生産の第一の目的は労働力を発展させることであるとの考え方にまでいたるのである。

機械と人間との関係についても、暉峻博士はあくまでも生産力の観点に立ってこれを考察しようとする。「人間は機械を統御し、それを思う存分駆使するところに、真の人間の能力の発揮があるのである。そこに始めて生産性の昂場がある。生産能力の進歩がある」。<sup>(19)</sup> 「工具や機械は人間のからだの一部分である。機械や工具の働きは、人間の労働意志——精神活動の表現である。生産機械はただ動力によって、生産目的のためにのみ動いているのではない。人間を離れ、人間に結びついていない生産機械はないのである。人間と機械とは一体である。否、人間の力によって機械は始めて、その能力を完全に発揮することが出来るのである」。<sup>(20)</sup> 人間こそが機械を動かしているのだというこの把握は、暉峻博士においてさらに深まって次のような思想となっている。すなわち、「技術と機械とは人間を支配するものではなくして、個々の従業員の労働力の中に、極めて自然に、そして豊かに、内包せらるべきである。……機械は、生産をのみ目的として組み立てられたものであるが、これは人間の労働力を伸張し、発揚せしめるための工具と見るときに、始めて最も有効にその全能力を発揮し得るものである」<sup>(21)</sup> と。機械は人間労働力の発展のための手段とみなされている。

暉峻博士において、労働力の浪費・破壊に対する批判の目は、厳しく作業現場にむけられる。博士は生理的エネルギー需給の機構を説明されたのちいう、「変調な労働状態が日を重ねて行くと、そこに作業力の減退、健康の破壊が起ってくる。詰り労働者の疾病は作業力の行使の適否、即ち全身機構の順調なる運行のもとに作業が営まれているかどうかにかかっているので、若しそこに無理があると疾病が発生する」<sup>(22)</sup>のである。また労働災害につい

ては次のように明言される、「産業界に起る災害の多くは、天災の如く、避け得られないものではない。もともと、人間の能力によって、工夫せられた工業的技術や、人間の作り出した環境や生産工程の間に起るものであるから、これは全部避け得られるものである」<sup>(23)</sup>、と。

いま一つ、暉峻博士が結合労働力の概念に接近している点が注目されなくてはならない。すなわち次の如くである。「他の仕事場の労働力では代へることの出来ない、独特の性格が、その仕事場で養成され、その仕事場の仕事に熟達した労働力で、その職場の特有の任務を分担して行く。それが仕事場の労働組織の本質である。……私は、この頃、この仕事場に独特な労働力を結成労働力と云っているのである。即ち似通った体質、似通った体格、似通った気質の上に、作業特異の性格が出来、その性格に基いて生産活動もいと生まれ、消費生活もいと生まれる。……かかる労働力が横に結びついて職場を守るのである。それはまた極めて責任分担の明らかな労働力であって、これを結成労働力というのである」。<sup>(24)</sup> 引用にみるように、博士のいわゆる「結成労働力」の概念の中には、協業と、さらに分業とによって相互に労働力が結合することと、いま一つ、各職場の特殊性に応じて特殊な労働力が形成されることとの二つの内容が包まれている。この二つの内容を統一して考えていることの意味は、「結成労働力」なるものが個別の労働力を任意に結合しただけでは成立しないものであること、その「結成労働力」がいかなる社会的形態のもとに組織されたかにかかわらず、ともかく「結成労働力」としての実を上げるためには、個々の労働力の発展とは区別される「結成労働力」としての発展が必要であること、を暉峻博士が強調しているのだという点に想いをいたすとき、理解しうるものとなる。

また、博士は、最適労働時間論を批判して次のようにのべている。「工場で働く時間のことだけを考へ、或は最高の生産を勝ち得ることの出来る時間の長さを、労働時間の標準とした時代がある。今までは九時間でやって居ったけれども、それを八時間にすれば生産が五パーセント、十パーセント上る、だから労働時間を八時間にした方が有利であると云う、そう云う報告が沢山出

ている。そういう打算は、今日ではもう吾々は承服出来ない。そうではない。生産が増大するだけでなしに、其一個の従業員の日常生活が正しく運行される労働時間であることが必要なのである。かかる労働時間は従業員の肉体的、精神的の能力が能く保持され、能く伸びて行くと言うことを意味するのである。能く労働力を保持し、能く労働力を伸ばし得るという従業員の生活は、其労働力の活用によって支えられて居る所の家庭生活が、極めて幸福であることを意味する」<sup>(25)</sup>、と。暉峻博士が、労働科学によりつつ、最適労働時間論への批判の観点に立っていることは、博士が労働力を考える場合に、当面の生産力にとって必要とされている質の労働力を考えるだけではなく、つねに生産力の主体としての労働力を考えていることと結びついている。

## II

暉峻義等博士のみとめた日本の現実には、労働力を伸張し涵養している社会ではなく、労働力を浪費している社会であった。その原因について、博士はどのように考えたか。

まず、暉峻博士はいう、「勤労における賃銀勘定の成立、之が工業生産力、勤労能力の萎微を全体的に來している唯一の原因である。品物と能力とが、金銭を以て評価されるのが、資本主義的功利的人生観である。産業従業員の作業能力を萎微せしめる主要な原因の一つは、長日月に涉って習い性となったこの賃銀制度の結果である」<sup>(26)</sup>、と。すなわち、賃労働がいけないというのである。その理由は、次の言葉にうかがわれる。「少くとも常備賃銀を支払う全部の工場では、従業員は或は八分だけの力しか出して居ないのではないが、十の力を有って居ながらそれをこの時局に於て活用せずにいる。……又、出来高払い制度下の従業員はその出来高払いの制度のために、己が健康と労働力を自ら酷使し、生産力のより良き将来の伸張を犠牲にして省みず、ただ賃銀収入の多からんことを望んで仕事してる」<sup>(27)</sup>。つまり、賃労働にあっては、労働者の目的は賃銀であって、決して労働そのものではないし、



労働を通じての労働力の発展ではない。労働は賃銀を得るための手段にすぎない。そのことが、労働と労働力とをゆがめるのだ、というのである。暉峻博士は、また別の個所では、同じことを次のようにのべている。「自らのしている仕事に対して、その価値を感じることの出来る従業員は、正しく向上する従業員である。自分のしていることに対して価値を認め得ない従業員は、向上しえない人で、生産力を十分に発揮し得ない従業員である」。「賃銀を以て人間を激励し、残業手当を以て鞭撻し、能率賃銀をもって人間を駆使することは、最善の方法ではないのみならず、凡そ害があって益がないのである。それは畢竟するに、人格の本質まで喰い入らない、外面からの、浅薄な方法である」。(28)

同時に、暉峻博士は、結合労働力の発展と機械の発展が当面もたらしたもののについて、慎重に吟味している。「工場で働いている際の従業員の生産的生活には、何かそこに機械の重圧がある。工場労働組織から来る、人間の能力を抑圧する或る大なる力の圧迫がある。この圧迫のために時として労働意志が萎微してくる」(29)。

「ここに一言しなくてはならないことがある。それは労働力は一日の作業時間内でも決して均一なものではなくして、時間的な波動のあること、この波動は人間の生命機杼の自然性に深く基いていると云うことである。この事実を無視して作業を課し、生産行程を整へることは、労働力の発揚の円滑を期する所以ではない。作業が機械化し、単純化すればするほど、人間の労働は人間の自然性に反して行はれる傾向が濃厚になる。しかしながら、自然性の無視の上には、決して労働力の発揮と伸張とは本質的に起り得ないのである。機械化と作業の単純化によって、生産が増進したと見えるのは、機械的技術と、それへの習熟とによって、生命機杼の自然性の無視から来る能力の低下が、僅かに覆はれているに過ぎないのである。やがては労働力の磨滅による、その早期廢滅が来るのである。かくて機械的産業は生産を増加することによって、人間を富裕ならしめ得たが、人間の労働力そのものは、漸次に枯渇してゆくというような、悲惨な事実が現はれて来るのである。吾々は現

に国民体位の低下という、現下の重大問題に当面しているのである」<sup>(30)</sup>。

「人間の労働力は、ここに機械的生産の単なる補助者として、機械の性能を補うものとして、否、機械の隷属者としての地位に転落しなくてはならなかったということは、機械的産業の及ぼした最も重大な問題であったのである。この隷属的な生産技術者としての労働力には、澁刺たる創造力の発展は望めない。創造力の枯渇する所に、生産事業上の底力は失なわれる」<sup>(34)</sup>。

結合労働力が組織され、「人間とその僚友との生産的行動を核心とする結びつきが生れる」と、「従業員がそれを自覚するとせざるとにかかわらず、この技術的なお互の結合と統一には、ある圧力の存在が必要」となる。この「集団的活動」において、「個人の特性・性格・年令及び性は、全体として否定されている。またそこには個人の自由意志は多くの場合極めて局限されたる範囲に限定せられる」。かくてたとえば、「不健康の自覚又は疾病の危惧のために職場を離れ、休養をとることは、すべての勤労大衆に許容されているところであるが、この場合、彼は先づ医師の診断を必要とし、或はそれを必要としないまでも、彼は彼の職場に於けるその任務不履行が、その職場とその同僚に与える現実的な影響を眼のあたり見、職場の蒙る経済的不利益からの眼に見えない圧迫から解放されることは不可能である。一人の健康なる従業員を支配している、生産機構の重圧又は生産事業場の鉄則は、一人の休養を必要とする従業員にとっては、更に一層の重い圧力であり鉄則である」<sup>(32)</sup>。また、結合労働力の内容をなす全体労働者と部分労働者の矛盾についても触れられる。「私は近代生産技術を支配する特性の一つの重要なものとして、驚くべき作業分化の進歩と、それに伴う人間の生産的活動の単調化をここにあげなければならぬ。……作業分化と単純化と単調性とは、大量生産と云う点では、異常な進歩をもたらした原因である。人類に物的生活資源を豊富ならしめた原因でありうるが、人間それ自身の、その生活の貧困化はこれに由来するのである。……大量の筋肉群を使用しなければならない作業は、生産的の事業所からその影を没してゆく。これに代って生れるものは、局所的な身体部位と、小群の筋肉の繊細なる作業である。運動の量は小

さいが、その速度が早く、且つ持続的に長時間の緊張を必要とする作業の性質である。……この事項は近代の文化諸国民に於ける体力の低下の現象、並にその原因とは離るべからざる關聯を有するものである」<sup>(33)</sup>。

結合労働力および機械制大工業との関連で考察された、このような労働力破壊の諸契機を、暉峻博士は決して生産力そのものの責任にはしなかった。しかし、また、博士はそれを資本制社会の法則性と明言されたわけでもなかった。「明治、大正の時代を通じて、西欧から科学と技術とが輸入され、人間の仕事が機械に置き換えられ、日本の工業機構は大機械工業に移ると同時に、人間の勤労の尊さが忘れられてしまった。……人々は資本を重視し、生産機械の進歩改善には、極力、力を注いだのであるが、人の品性を高め、人間の生活を向上することの大切さを忘れていたのである。人間は機械の従属者となり、人を造ることよりは、物を造ることの方が一層に大切であり、人間の働きのねうちよりも、機械や動力の働きの方が大切なものとせられ、人間の勤労のねうちは、生産費中に於て、賃銀の占める割合の大小によって定められるというような場合もあったのである」<sup>(34)</sup>。しかし、「生産費を低下しようとすることを考える前に、先づ従業員の品質を高め、従業員の教養を高め、その技術的向上を促し、その労働意志を振作することに努力し、それに成功をおさめれば、その結果として、期せずして、生産費が低下してくるのである。この因果関係が先づ明瞭に認識せられぬばならぬと思うのである。……人間の品質を高め、その能力を高めることによって、その結果として生産費が自然と下ってくる。これが因果の法則にのっとった行き方で、これこそ、産業的文化の本質的向上である」<sup>(35)</sup> というのである。暉峻博士は、労働を賃労働とし、したがって労働の社会的な位置づけを、それに支払った価格の限度におしこめる社会を批判しながらも、一方では、思想を代えることによって、生産費すなわち費用価格という労働生産性の資本制的に歪曲された現象形態を、真の労働生産性とおきかえることができるかのようにのべるのである。

賃労働を、労働力の伸張を妨げるものとして批判した暉峻博士は、労働力

の伸張をはかるために、やはり労賃政策にもどることになる。「高賃銀は従業員の品質が、本質的に向上したから、その向上した品質に対して、高い報酬が与えられて行くのである。この労働力の品質の向上は、その結果として生産費を低下する。最も低い生産費は、その品質に於て、最も優れた労働力によって実現されるのである。即ち低生産費を実現しようと思へば、立派な労働力に対しては、企業の許す限りの、最高の賃銀を支払うべきである。秀れた労働力に対して、出来る限り誠意ある、最高賃銀が支払はれる所では、低生産費が実現されてくるのである」<sup>(36)</sup>。かようにして、「人間が生産機械のために使はれるのではなくして、機械を創造し、思う存分に機械を駆使することによって、国家生産力を高める人間を多数に作る」<sup>(37)</sup> ためにこそ、高賃銀で刺激すべきであると考えるのである。

結合労働力と機械制大工業の発展にともなう、上述のごとき労働力破壊の諸契機の発展に対して、暉峻博士は何をもって対抗されようとするか。その一は体育の振興である。「生産力の拡充は生産事業場に於ける技術の向上や、技術を修得したる人間の量の増加、或は作業能率の向上というような、生産事業場と生産過程を支配する諸条件を整へることだけでは十分でない。それのみでは機械的生産技術の進歩には貢献し得られるかも知れないが、その進歩それ自身の生み出す人間への重圧と鉄則とは除去されるどころか増強される。だからして大衆に体育を加えることによって、それを緩和するのみならず、更に一步を進めて、適応能力を補強し、作業意志を振作するの必要がある」<sup>(38)</sup>すなわち、体育は、一方では、作業が身体の一部のみ利用するものかつ神経的なものになるのに応じて、作業で利用されなかった身体他の部分を活用することによって、全体的な労働力を保持すると同時に、他方では身心を鍛えることによって、苛酷な作業に耐えうるように適応力を増す、というのである。その二は知育の振興である。「現代の分化し、単純化したる作業に於て、業の中にたのしみを見出すためには、人は先づ、今日の作業の基礎をなしている科学と、その科学が技術に与へている精度について、彼の関心を深め、技術のもつ、精度と組織に心をよせることによって、科学的に

思惟し行動する人にならねばならない。また、今日の生産事業場の中では、人は単に自分一個の作業をのみ考へ、それを了解するだけでは、十分に仕事を理解したとはいひ得ない。彼は彼自身の作業の前と後とに相联接し、彼の作業に密接に関係している。彼の同僚の作業をよく理解することに努力しなくてはならない。即ち彼は個々の分化され、単一化された作業が、科学的精度によって、かくも緊密に、正確に、相結ばれ、企画せられて、進行する工程に、その眼をそそがねばならない。……そして彼にとっては、誠に単純で、無味乾燥な部分的作業が、その全工程に対する地位を知り、彼の作業の重要性を自覚することができるであろう」<sup>(39)</sup>。すなわち、からだはマニュアル的分業の些少な一部分に結びつけられていても、知育が彼の心に作業の全工程を把みとらせ、彼を自覚的な結合労働力の一員とするであろう、そして労働力の本来の創造力を回復するであろう、というのである。

生産力の発展の方向への信頼を失なうことなく、「機械的生産手段における機械とその働きの中に、人格性を復興すること」<sup>(40)</sup>をめざす暉峻博士は、生産手段と資本との区別がないために、「労働力の資本への隷属ではなくして、資本による労働力の本質的な啓開」<sup>(41)</sup>を構想するのである。

### III

暉峻義等博士は、ここにとり上げた著書が公刊された当時に進展しつつあった戦時統制経済を、労働力の浪費と涵養のダイナミズムの観点からどのように評価していたのであろうか。

暉峻博士は、くりかえし、「平常の覚悟が非常時局の覚悟である。……非常時局が私に教えているところは、平常の道が大切であると云うことである。時局が変化したがために別の道を発見して進むのではない」<sup>(42)</sup>、とのべている。この考え方は、「円いものをほんとうに円いとする理性の光り、知性によって物を明かに見、明かに物を見極め、正しい認識の上に、日常生活のあらゆる行動を起してゆくと云うことは、正に科学の教へるところである」<sup>(43)</sup>、という、科学者の信念によって裏づけられていた。

いうまでもなく、暉峻博士はとりわけ自然科学者であった。したがって、博士が、日本の戦時経済が労働力の浪費をひきおこす資本主義の諸傾向を克服する契機となるのではないかと期待したとしても、それを酷評することはできまい。博士は、戦時下の政策に、労働力涵養の内容をもたせようと努力されるのである。「産業上に於て、国家的必要に従い、邦家のために生命を賭し、健康を擲つても、国家の要求する所の勤労に従はなければならないと云う時期の到来は、極めて重大なる時局でなければならぬ。銃後の生産活動は、つとめてその健全性と持久性を確保して進むにある」<sup>(44)</sup>。またいう、「産業報国に対して、従業員として採るべき道は、先づ健康で、精一ぱいよく働くことにつきる。これは平々坦々たる道であるが、又考へ方によっては至難な道だとも云へるのである。併しどうしても、この途から進んで行かねばならない」<sup>(45)</sup>。さらにいう、「個人の能力を遺憾なく活用し、生涯を通じて、その能力を百パーセントに発揮することに努力すると云うのは、窮極するところ、皇運を扶翼し奉ることの出来る、国家の柱石としての生活活動を基礎とする日常生活の樹立を意味するのである。新生活運動の目標は、わが国では極めて明瞭である」<sup>(46)</sup>。かように、労働力を涵養することこそが、産業報国であり、新生活運動の目標たりうるものであると、博士は強調される。

暉峻博士はまた、戦時統制経済が賃労働の欠陥を克服する契機となることを期待する。すなわち、「長期建設の時代に於ける工場の賃銀労働は、従前の賃銀仕事ではないのである。……すなわち時局下では工場労働の概念が、すっかり更新されなくてはならないのである。即ち個人の経済的利益のために働くのではなくして、労働そのものが、国家に対する立派な行である。奉公の行なのである。賃銀を得ながら賃銀労働をするその働きそのものが、御奉公なのである。これが産業労働に対する国民的認識なのである。……そこに仕事の新しい生活運動の核心があるのである」<sup>(47)</sup>。またいう、「功利的な人生観の固い殻をぶち破って、そこに人格としての勤労の本質を宣揚する 때가来たのである。産業報国運動は諸君の腹のどん底の入れ替への問題で

ある。……かくなると仕事場の勤労は最早苦痛の勤労ではなく、それは人生の喜びの源泉となり、人間の道場として又最善の国民的資質の涵養場となるのである」<sup>(48)</sup>。

しかし、暉峻博士が戦時統制経済に期待するものと、戦時統制経済の現実とは一致しない。昭和13年の論文の中に、博士は、「自然条件の不良な」炭山において労働力不足から婦人と青年の入坑禁止年限の延期論が台頭していることを指摘し、「併しその無理からぬ事情は、直ちに婦人と青年の入坑年限の延期の唯一の理由とはならないとするのが私の見解である。……これら自然条件に於て恵まれない炭山に対しては、先づ経済的に、技術的に、その出炭能力の拡大の補強対策が国家の援助により、或は大企業の指導と協力とによって行はれることが先決事項である」<sup>(49)</sup>、と批判する。また、「事変突発後、長労働時間の実施の範囲が著しく拡大された」ことを指摘し、「斯の如きは作業能力の長期に亙る保持を達成する所以ではない」<sup>(50)</sup>、と批判する。さらに、「事変後」罹病率が高まり、「労働力減退」のおこっていることを遺憾としているのである。<sup>(51)</sup> 昭和15年の著書の中には、「避け得られる災害が、時局下に頻発するのであるから、全く遺憾千万なことである」<sup>(52)</sup> といい、「何処でも人間の力が求められているに拘らず、人間が今日程不真面目に取扱はれている時代はない」<sup>(53)</sup>、と憤慨されるのである。

産業報国運動や新生活運動を理念としては支持しつつも、暉峻博士は、具体的にはこれらにするどい批判を加えるのである。「食物を改善するとか、着物の様式を変へるとか、一汁一菜にするとかいうことも、時と場合によっては、勿論必要なことでもあるが」<sup>(54)</sup>、これは新生活運動の核心ではありえない。さらに、「食糧の節約をすすめる前に、食糧の選択に対して豊かなる能力を、国民の下層に作り上げることである。それが為には出来るだけよい賃銀である。……日本の国民の栄養を高めようとするならば、下層国民群、経済的に恵まれない国民群の収入を多くするというだけでなければ食糧の自由選択の範囲は広まらない。栄養の改善は一片の道徳運動ではあり得ない」<sup>(55)</sup>。かように、暉峻博士は、生活様式を変化させ、労働力の価値を引き

下げることによって労働力の保全を計ろうとする方向には、強い批判の立場をとる。博士によれば、労働者生活の全面的な向上に沿ってのみ、労働力の涵養があるのである。この点は、博士が、いたずらに共同炊事をさげぶ意見を批判しつつ、「一家の主婦がその家族全体の食物に対する嗜好を知り、その生活の全体を知り、その認識に基づいて、家族全員に対する食事の用意をする」<sup>(56)</sup> ことの重要性を指摘していることなどにうかがうことができる。

同様にして暉峻博士はいう、「労務者に対する精神訓練の必要なことは私も十分にこれを認める。併しその精神訓練は『疲れた』状態に対して行はれては効果はない。先づ覚醒——澆刺たる生命活動、よくねむり足り、よく休養が足りて、心身ともに極めて爽快な、自然な、生理的状态にあらしめることが実は精神の訓練そのものの基本的問題なのである。この重大な事実を人々は見逃している。これは常識でなくして科学的実証を経た科学的認識なのだ」<sup>(57)</sup>、と。またいう、今や「住宅建設は人間を住はせる箱をたてるという意味でしかない。鶏舎や畜舎をたてる時に、農民がその疾病の発生を惧れ、陽あたりのよい、通風のよい、清掃のし易い、飼料のやり易いことを目標にし、且つ群生活に於ける運動の不足に備へて、鶏舎に小庭を附属せしめるといったように、人間がその愛育する畜類の生活に対処するために整へる諸種の用意にすら、労務者住宅の建設に際しての用意は劣っているのではないか」<sup>(58)</sup>、と。

かくて暉峻博士は、昭和13年の著書においては、軍需工場のごとき「義務的労働に対しては、必ず義務的休養の制度を以て対処しなければならない」<sup>(59)</sup>、とか、事業者は「賃銀収入の増加する方法を工夫すると同時に、その（労働者の一荒又）家庭生活、特にその消費経済にまで立入って之を指導する必要がある」<sup>(60)</sup>、とかのべていたのであるが、昭和15年の著書においては、かえって、産業報国運動との関連の中においてではあるが、「生産に従事する従業員諸君が、自ら立って自らを護り、かけがえのない貴い自己の能力を活かし、働かず事に、自ら努力し工夫しなければならぬ」<sup>(61)</sup>、とのべるのである。生産力としての労働力に固執されることによって、暉峻博士は



生産関係への批判の立場から最終的に離れることになかった。

- (1) 暉峻義等, 「労働力の再編成」, 昭和15年7月(以下Bと略), 77—78頁。
- (2) 同上, 127頁。
- (3) 暉峻義等, 「生産と労働」, 昭和13年9月(以下Aと略), 53頁。
- (4) A, 14頁。参照B, 238—239頁。
- (5) B, 127頁。
- (6) 同上, 127頁。
- (7) A, 172—173頁。
- (8) B, 83頁。
- (9) A, 173頁。
- (10) A, 174頁。
- (11) A, 140頁。
- (12) A, 142頁。
- (13) A, 81頁。
- (14) A, 75頁。
- (15) A, 57—59頁。
- (16) A, 56—57頁。
- (17) A, 199頁。
- (18) A, 106頁。
- (19) A, 115頁。
- (20) B, 38頁。
- (21) A, 202—208頁。
- (22) A, 157—158頁。
- (23) B, 174頁。
- (24) B, 102頁。
- (25) A, 145—146頁。
- (26) A, 87—88頁。
- (27) A, 64—65頁。
- (28) B, 25—26頁。
- (29) A, 170頁。
- (30) A, 200—201頁。
- (31) A, 202頁。
- (32) A, 203—206頁。
- (33) A, 207—208頁。
- (34) 暉峻義等, 「勤労と文化」(以下Cと略), 210—211頁。

- (35) B, 23—24頁。
- (36) B, 31—32頁。
- (37) B, 49頁。
- (38) A, 210—211頁。
- (39) C, 99—100頁。
- (40) C, 241頁。
- (41) B, 49頁。
- (42) A, 45—46頁。他に B, 195頁。
- (43) B, 208頁。
- (44) A, 143頁。
- (45) B, 96頁。
- (46) B, 225—226頁。
- (47) B, 201頁。
- (48) B, 87—88頁。
- (49) A, 232頁。(「労働科学研究」第15巻第2号)
- (50) A, 241頁, 252頁。
- (51) A, 253—264頁。
- (57) B, 174頁。
- (53) B, 241頁。
- (54) B, 201頁。
- (55) B, 218—219頁。
- (56) B, 256頁。
- (57) C, 70頁。
- (58) C, 24頁。
- (59) A, 71頁。
- (60) A, 181頁。
- (61) B, 90頁。

(なお引用にあたってかなづかいを変えたところがある)